

2619

穀書
 米穀取引所定款
 同 申合規則
 同 成規 附 格台表



114
A3701

以素甘其子孫之



明治七年十月第百三拾八號所布告其等同
年十月第百七拾四號所布告其等同
之趣意並其在列所創立此處此布告其同
年十月第百七拾四號所布告其同
告其同準會社中規則其同更其同
此仰後其同則其同
其同成規其同其同
其同

大正十一年四月
環侯爵郵寄贈

可古先母名極古新之以上

明治八年一月廿七日

第一大区五小区駿河町

三井物産店名代

富後專藏行

第一大区五小区大田町

田中物産店名代

益川定三店

同大区五小区通橋町

下村三太郎代理

聖口物産店

第一大区三小区津島町

西村七左衛門養父

西村郡司

第一大区五小区瀬下物所

荒尾龜次郎

第一方区控言尔区坊新理町

後方古吉町

第五区五少区本船町

岩保利全港

大藏卿大隈重信殿

東京米穀取引所定款

定款

京
市殺戸記之款

明正徳年十二月廿七日
若之趣 其基年同年十月廿七日
拂武戸門 渡海之做 了 刻之 市殺戸記之款
刻立スル 為之 其 株主 幸 極 厚 之 三 次 之
之 條 之 如 左

第一條

市殺戸記之款 各戸之 市殺戸記之款 係 上 稱 下 了

第二條

本教書院在備前國津和野郡津和野町津和野
運糧所所屬之津和野之津和野町津和野

第三條

本教書院之元金七百五十圓之津和野町津和野
町一棟ト云々

但本教書院之津和野町津和野町津和野町津和野町
之津和野町津和野町津和野町津和野町津和野町

割合ニ準ルニ之ニ增加ス

第四條

本教書院之津和野町津和野町津和野町津和野町
町向五人以上之津和野町津和野町津和野町津和野町
本教書院之津和野町津和野町津和野町津和野町津和野町
町津和野町津和野町津和野町津和野町津和野町津和野町
津和野町津和野町津和野町津和野町津和野町津和野町

第五條

肝煎ノ譽儀ニシテ中ヨリ頭一人副頭一人を
撰擧シ此人ノ規則ニ從ヒ年限中ニ勤ムルコト

但所取ル者其任ニ任セラルカモ其肝煎等ノ

三分中其ノ一ノ任セヨリテ之ヲ退任セヨルコト

ト又副頭ノ頭有ル所ニルカ其他ノ事取付

其事務を代理スル迄ト云々勤向ハ肝煎同

格多クハト

肝煎等ノ文取付事務ヲ取ルコト其任人出

納方針ニテ方簿記方等ノ役人ヲ担任シ其給料

ヲ所定ノ衆議ノ上ヨリ所定ノ得失ト考ヘ或ハ此

役人等ノ重年ト爲ルコト其之ヲ極免スルノ權アリト

肝煎等ノ又役人等ノ職掌ヲ分課シ其身元ノ引

替人ヲ納メ四列會ニ據定ムルノ權アリト

肝煎等ハ又ニニツク

書損余紙

肝煎等、又向後、肝煎格等ノ法ト定メ、此格等
ノ衆議ニ異議起ル時ハ之ヲ裁決スル事、裁決人
ト爲之ルノ權アリ、肝煎等、都府、府、縣、各
所、長ハ適任、取替ト爲行フ權アリ、之モ亦、
例ト爲方ト爲事トシテ、存スル所、例、便等ト爲リ
際、例中ト揚示ル事、諸、格、等、ノ、條、款、等、ハ、各、所、格、等、
ノ、格、等、トシテ、之、ノ、條、款、等、トシ

肝煎等、又向後、肝煎格等ノ法ト定メ、此格等
ノ衆議ニ異議起ル時ハ之ヲ裁決スル事、裁決人
ト爲之ルノ權アリ、肝煎等、都府、府、縣、各
所、長ハ適任、取替ト爲行フ權アリ、之モ亦、
例ト爲方ト爲事トシテ、存スル所、例、便等ト爲リ
際、例中ト揚示ル事、諸、格、等、ノ、條、款、等、ハ、各、所、格、等、
ノ、格、等、トシテ、之、ノ、條、款、等、トシ

第ハ六條

當為引所定實業先狀を得たる日ヨリ之ヲ承継スルニ
但シ三層ニ以テ之ヲ林主等ノ病名以テ之ヲ考案引所ヲ
願ス事ヲ得合ト雜正三月前之ヲ國債取
上申之被テ其業取組ノ考案を定ムル所ニシテ
ラサレ願居スル丁ヲ得ル所ナリ

第七條

當為引所定親口林主等ノ衆議以テ何時ニテモ
之ヲ改正スル事ヲ得ル所ナリ

但シ改正セシカヤ之國債取申スル
以テ正ノ林主等ノ衆議以テ之ヲ
林主等ノ旨ノ集會ニ定ムル所ナリ

右ノ條々ヲ取極メタル證據トシテ姓名ヲ記シ
之ヲ候也

明治六年

林主連印

古者未嘗教而自定之教之謂通也德本誠一
通寫一過之謂也他之通以同文言之特之謂
引而三截之謂也其保信之為私者自記
名謂之私保也

四行九年

東家未教而行

之謂也

副記

記

鄉國傳類啟

古者未嘗教而自定之教之謂通也

古之未嘗教而自定之教之謂通也其保信之為私
通之謂也國債者之謂也其保信之為私

古自三記名烟叶全候也

明治八年

高島市鶴石町

子能人

副町

町

高島市鶴石町

株主姓名 宿 所 株 高 金 額

合 人 合 何 株 合 金 田

右書所引乃林道始為商所表之ヲ三通之魂ノ
本紙一通寫之通ヲ量ニ他ノ一通同文言テ其
之ヲ所引所ニ截置俟仍其保能為私言
ヲ知名初印致條也

明治八年

東京市役所

子能人

副政官

江戶

郷國債頭殿

系系求穀五引而中合規則

申合規則

東京市役所規則

明治七年十二月廿七日
布告ノ趣意ニ基キ同年十月廿七日
告示ニ依リ修訂シテ
東京市役所規則ニシテ
第一條

東京市役所規則ニ依リ修訂シテ

意ヲ込込奉ヒテ之ヲ取扱フヘシ
所引所ニ於テ由般者實ノ約定ヲ為スニ株式引所
例ニ照準スル事勿論ナリト之共其種別ノ殊異ナル故
ヲ以テ殊ニ官有元裁ヲ乞フテ決定ニタル別冊由般
所引所規ノ條款々々ニ更ニ所引所ノ條例トシテ之
取引所ノ営業時間ハ毎日午前十時ヨリ午後四
時迄ト定メ毎月一日及一般ノ祝日ノ休業タルハ尤モ
右休業ノ日ハ其日ヨリハ所引所ニ掲示スヘシ

所引所奉ヒ奉一

第二條

所引所株主社員等ノ集會ニテ新行員十人ヲ選
舉スル事ハ毎年二月一日午前十時ヨリ午後四時迄ノ
間ニ當リ所引所ニ於テ之ヲ行フニ尤モ其集會ノ限越
スル柄ハ一月前ニ當リ所引所ノ頭目及社員ヨリ之ヲ同一
公告スル

所引所ハ以集會ハ一月前ニ株主社員等ノ内ヨリ三

ヲ選ニシテ之ヲ裁判役ト定メ置ク此裁判役ハ投票
ノ後當ラ決新ニタル上ニ其始末ヲ選舉ニタル新
肝至ノ姓名ヲ頭至至人ニ報告スルコト

第三條

頭至至人ハ右ノ裁判役ヨリ選舉ノ報告ヲ得共
此事ヲ當面引所ノ日記ニ録シ右ノ選舉ニ應ニタル
新肝至ニ通告スル事ヲ引所ニ於テ集會ヲラシメ申
述ムコト

此集會ハ當面引所ノ右ノ所ニ當テ選舉ノ時ハ
時ニ追テ過半ノ人負出席スル迄集會ヲ定ムコト

第四條

毎半投票ノ定日ニ當リ故障アリテ集會スルコトヲ
得サル時其事故ヲ公布シ追テ集會ノ日限ヲ定
ムコト但シ裁判役ノ選舉裁判役ノ報告新肝
至ノ投票都テ此規則ノ第三條第三條ニ從フコト
取引所役員ノ事

第五條

當可引所、役人等ト稱スルハ

肝煎内

取取
列取

支能人

出納方

計算法

簿記方

書記役等者、可引所、業件取取、関

計算法、支能人、差圖ニ從、取引所、諸事定、向ラ
管理ニ且時ニ差出スルキ報告計書類ヲ取引所ニ
之

第八條

當取引所ノ諸役人等ハ其職務ヲ履行スルニ勤ムルヲ
ノ證據トシテ奉職ノ善慥成ルヲ請人ヲ立タル身許
務狀ヲ肝煎ニ差出スルニ若シ此役人等ニ過失アリ
肝煎ニ其請人ニ過リテ相當ノ過怠謝金ヲ當人ヨ

り取立テ以テ當面引所ノ糧糶ヲ償フヘシ

第九條

當取引所ノ役人毎朝出勤、若シ役人暇有之候ニ
出勤候ニ少シク押スヘシ

若シ病氣甚外ノ故障ニテ出勤之難キ時ハ定例出勤
時限定之書面ニテ其故障趣テ同課ノ者ニ報シ同
課引之ヲ願面支能人ニ申出ヘシ

但願面所願支能人ナリモ同様タルヘシ

若シ其病氣七日以上ニ及ビ醫師容体書ヲ添テ
由テ申立テ三月以上出勤之難キ病氣ノ者ハ願
面所ノ役人ノ考案ヲ以テ之ヲ免スルカ代メ命スルカ
又ハ其給料ヲ差引ヘシ

社印領鑑之事

第十條

肝意ノ衆議ニテ決定シテ採用シタル當面引所ノ
印章ハ即チ如左

金銀割印



頭取ノ印



支店ノ印



書状割印



社印

東京米穀
賣買相場
取引所印

右ノ印章并ニ金庫鎖輪ノ類ハ委託人ノ内ニ毎之
ヲ預リ大切ニ之ヲ監守スルニ

元金増ノ事

第十一條

當所引取ノ金數ニ從ヒ元金ノ高ク増加スル時ハ該
所行爲者株主等ニ増株書込ノ事ヲ通ルルニ元
金増ノ甚ク株主等欲シク株數ニ應ジテ新規増
株ヲ所持スルノ理アルニ

若シ株主等ノ申ニ此増株ヲ書込シテ怠ル者アラハ
該所行爲者衆議ニテ此増株ノ賣買分ヲナスヘシ

株讓渡ノ事

第十二條

當の引合株の元帳に引合セタル上ニテ先液了り得
ハト雖モ其頭面肝意ノ許ラ得ヤト之ヲ他人ニ譲渡
シ或ハ質入ルハカラス

此株譲渡ノ儀ハ頭面肝意ノ許ラ得可引合ノ
元帳に引合セタル上ニテ何時タリモ其先支チニ尤其株手
形ノ書替ラサレ時ハ當の引合ヨリ割液ハ半利モ
全ハ新故ヲ論セズ其株ノ名前人ニ液スヘシ

此株手形ニ認ルモ能人之ニ印シ此株ハ取引合ノ
元帳に引合セタル上ニテ譲渡了り得ハト記載スヘシ
此株譲渡ノ前ニ株手形ヲ元株主ヨリ取引合ニ
請ル其裏面ハ書込ラ為シ頭面支能人印即ニ
之ヲ新株主ニ液スヘシ

記録之事

第十三條

當の引合定款ハ全規則或規章ニ行合振替ノ儀

二付裁判後ヨリ差出ル報告會議要件録等部
テ當面引取ル関係ノ書類之ヲ記録ニ綴込ニ頭
取支取人之ニ連印之後日ノ證據ニ截置ヘシ

第十四條

全解出納約定諸帳面毎日締ル類ニ毎日頭取支取
人之ニ捺印之各分課ニ於テ右切ニ監守セシムヘシ
會議要件録等日記類ニ掛リ書記役ニテ時
會後ノ出納及ニ決裁ノ件ニテ詳悉ニ具載シテ

頭取ノ役場ニ截置ヘシ

毎日ノ出納高差引有高控持主出納高差ノ
類ノ計算掛出納掛ニ於テ計算ヲ作り毎日現場
ノ模模ヲ頭取支取人之ニ差出ニ其捺印ヲ受ク可シ
又書記役ノ其日ノ中ニ毎日相場取廻支取人
ノ捺印ヲ受ケテ其表ヲ新聞社ニ報スヘシ

第十五條

當面引取ノ諸帳面其勘定方法結算表式ノ

製ハ當分日本或ラ用テ雖モ追テ洋式ノ簿記
法習熟ス上之ヲ改メスニ

經費之事

第十四條

當分引取諸般ノ經費ハ拂方ヨリ能ク任ナレモ成
丈ケ費用ノ定額ヲ支拂方ヲ年代内ヨリ命シテ小
拂ヲナサシメテ月限リ之ヲ類蒐シテ其統計ヲ合
計ト内釋トノ區ニ及ビ其計算トモ明瞭精確ニ

スニ尤モ其計畫ヨリ差出シ頭面檢印上肝
意ニ廻スニ

第十七條

當分引取ノ諸經費ハ其數目ヲ各トシテ其虛義ヲ求
メ財用ヲ蓄積ス可ラス又取引所ニ於テ飲酒遊
興ニ類スル所為アル可ラス能令ヒ何様ナル事故アリモ
之ニ類スル所為取引所ノ不取締ヲ表シ當分ノ
信任ヲ妨クルノ甚タルヲ以テ各々注意シテ質素儉

約ラ奉トスヘシ

第十八條

當取引所ノ賄方ニ日用ノ務雜費仕拂方并諸
品ノ廻違各所ノ掃除向并ニ少者務下締心
得少遣ノ者ヲ支配シテ其使用ラ心附ク且火盜ノ監
獲等ヲ十分ニ注意スヘシ

宿直并非常之事

第十九條

十

當取引所ノ泊番ノ賄方并手代ノ内ニテ文番ヲ以
テ相勤ムヘシ

但少遣以下ノ便宜定負ヲ立テ泊番セシムヘシ

第二十條

火災其外非常ノ事アラハ當取引所ノ役人等ハ速
ニ駈付各其持場ノ書類又ハ品ヲ監護ス可シ
尤モ萬一ノ節第一ニ持退クヘキ緊要品ニハ豫メ
人當ヲ配リ置キ泊番ノ者ハ直ニ其処置ヲシテ執念

庫に納り防火目録等マテ出散重ニ手配スハシ
非常駐付人足ハ常ニ之ヲ備ヘ置キ其者若シ今印
尺外套ヲ着セムヘシ尤モ持息ヘキ物品ハモ常ニ右
ノ令印ヲ附ケ置ヘシ 合印ハ追テ取定ムヘシ

俸給并配當金之事

第二十一條

當取引所役人月給旅費其他常或臨時之費
共其掛リニテ明細ナル調書ヲ作り頭取支配人ノ檢

印ヲ受ケ出納方ヨリ之ヲ受取ルヘシ

第二十二條

當取引所役人ハ各月給ヲ支給スト雖正畢竟
其勤惰ニヨリテ殖益ノ多寡ヲ生スルヲ先ツ其
月給ハ相當ノ割合ヨリ減省ニテ及ニ其
制ヲ定メ別ニ利益金内ヨリ賞典支給ノ法ヲ
設ケ殖益金ノ模範ニ應ニテ之ヲ配當スヘシ
右殖益金能者ノ割合ハ毎年兩度高列ノ所

後定之、簿別冊利を令能當之則之役、之
改正之事

第二十三條

此中全規則、所定三分二以上、論ニ從フテ之ヲ改正
之又ハ之ヲ増補スル事ヲ得

右に當取別冊、頭取并庶衆議、之制定之ニ付申
令規則、條數各古格守シテ、敢テ違犯アルハカラス

萬一停廢スル所業アラズ株主等ハ衆議ニ從テ其ハ分
ヲ受ヘキト各ニ承諾スル所アリ故ニ證トシテ頭取并庶
ノ全書ニ茲ニ姓名ヲ自記シ調印イタシ共也

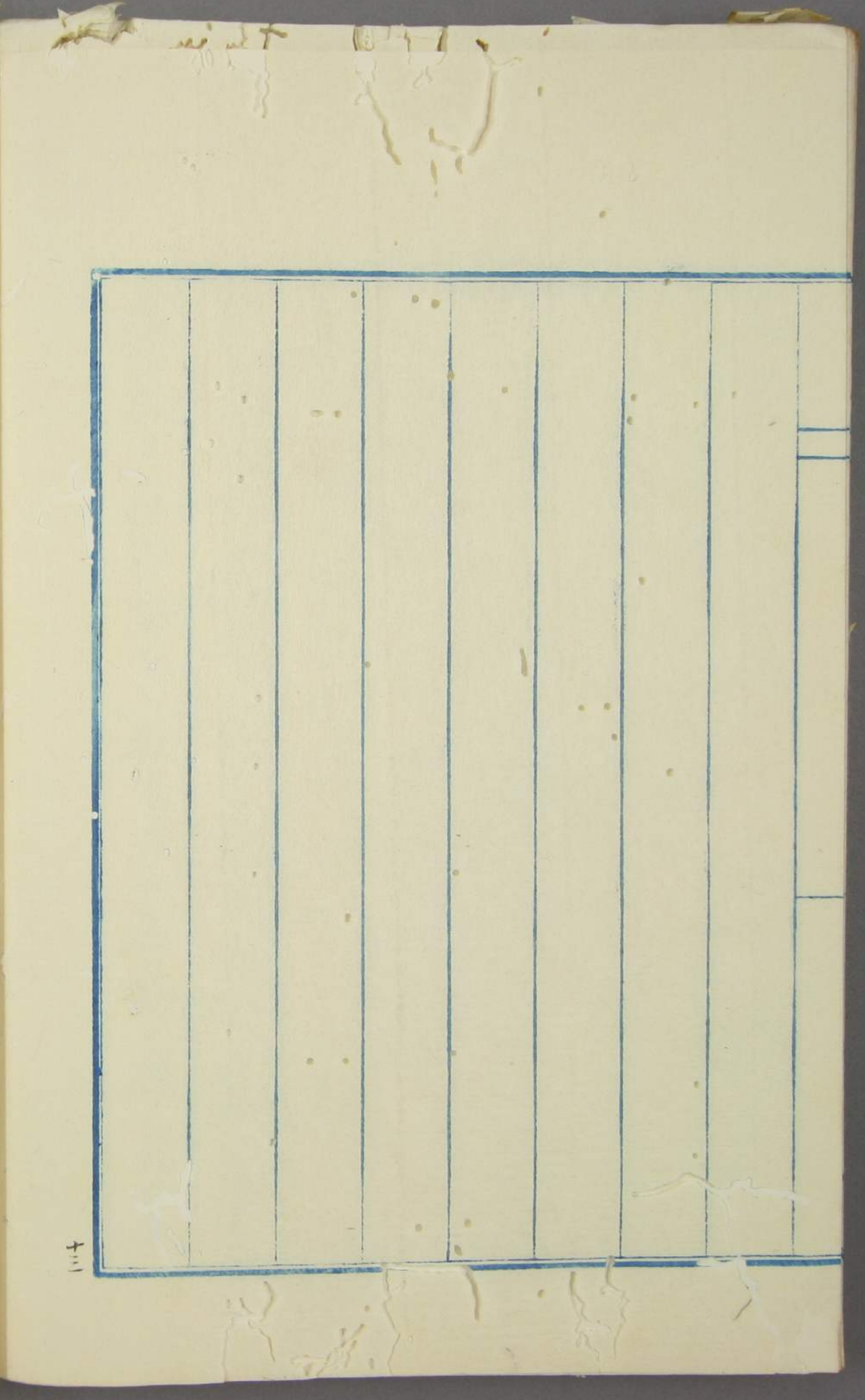
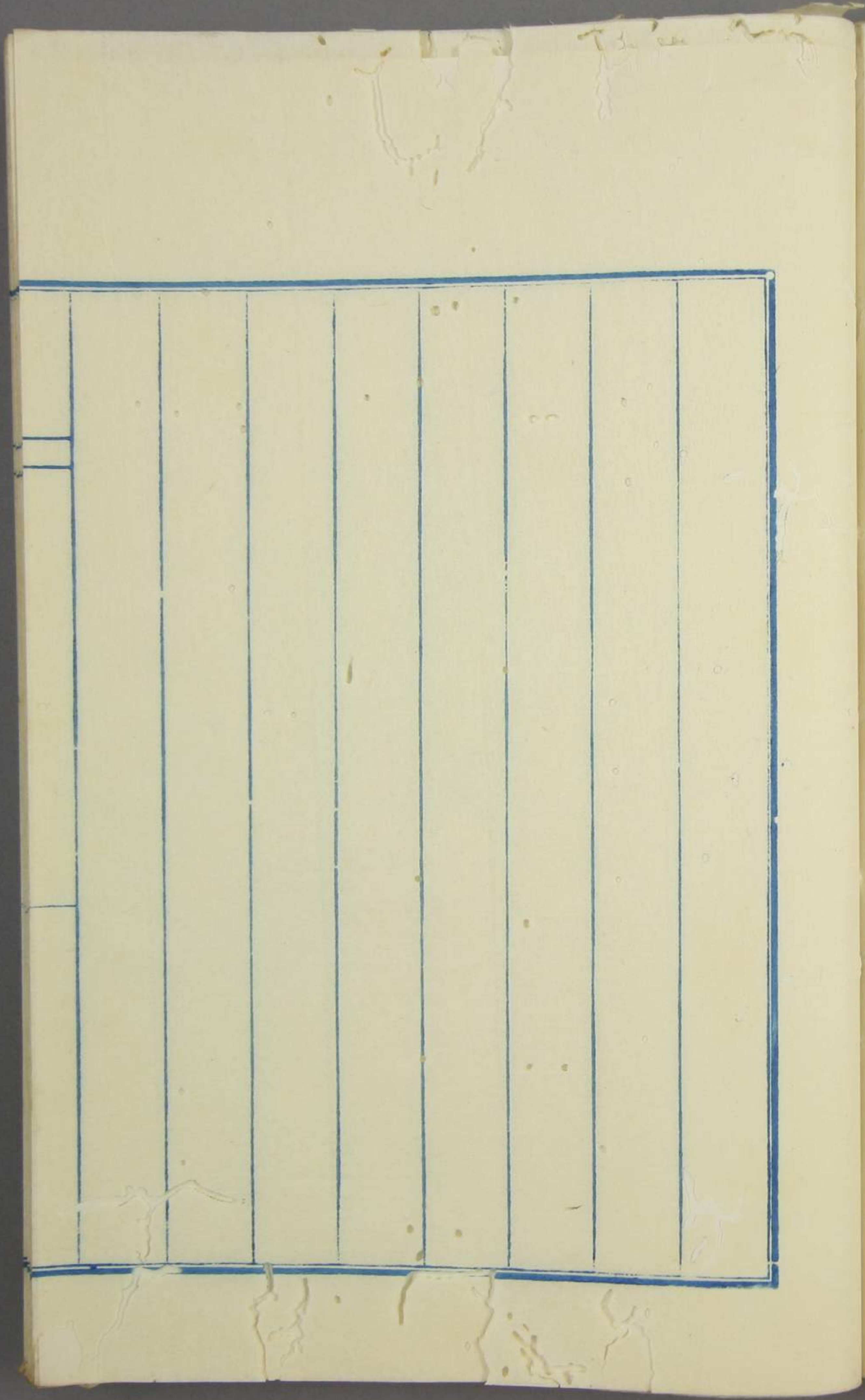
明治八年

東京株式會社引所

頭取

副頭取

肝煎



東京米穀取引成規

東京米穀取引成規

當取引所營業ノ順序ハ株式取引條例ニ準據スヘキ

事勿論タリト云凡其種類ノ殊異アルニヨリ取引所肝煎等

ノ考案ヲ以テ當分ノ中官府ノ允裁ヲ乞フテ之ヲ定メタル

取引成規ノ條款如左

米穀賣買約定之事

第一條

當取引所於テ賣買スヘキ米穀ハ武州米ヲ建米トシ格石ヲ以テ

切手一通ト定メ一通以上何通ニテモ賣買双方ノ控ニ任セテ約定ヲ
為スコシ

第二條

賣買ノ約定期限ニケ月ヲ踰ニ可ラスト且遠國ニテ買付ケタル品ヲ
東京ニ運輸スル為メ事實時間ヲ要スル分ハ猶ニケ月ヲ延シテ約定セ
シルコトアル可シ但シ時日ヲ期セラル賣買ノ約定ハ現場勘定ト見做ス
ヘシ

第三條

約定期限中賣買双方トモ之ヲ賣戻シ又ハ買戻シテ欲ル其時ノ
相場ヨリテ之ヲ仕戻スヲ得ニ然ル時ハ兼テ其者ヨリ預リタル
証拠金ハ其相場ニ照シテ決算シ之ヲ戻スニ故取引所賣
買約定ハ最初取組タル賣買双方ニテ其取引ヲ遂グルヲ
要ス満期迄其約定ヲ保ツ者ニテ真ノ取引ヲ為スコトス
可シ

第四條

約定ハ右建米ヲ以テスト云斤取引ノ節ハ代米ヲ用セテ得

ハ之尤之其代米價格ハ取引所ニ於テ定メタル格付ケノ通りタ
ルニ但之此格付ケハ毎年ノ豊凶随ヒ取引所ニ於テ集議ノ上
之ヲ決定スヘシ

證據金并追證據金差入方ノ事

第五條

當取引所ニ於テ賣買ノ約定ヲ為シタル上株式取引條例、
趣意ニ從ヒ約定金高、或割五分宛^{百割ノ二十五}ノ賣買方双方
ヨリ差入ルヘキ筈ナレバ當分間ハ當日ノ相場ニ見合セ割

宛百分ノヲ其當日半高翌日半高ツニ割合ト双方ヨリ差
入レ尚相場ノ昂落ニヨリテ凡ソ其半高ヲ損スルニ當ラハ
取引所ヨリ賣方ハ買方ニ違ヒ或度ニテモ追差ヲ為サズ
常ニ此割合ニ據セラレムコトニ尤モ取引所ノ頭取肝意
ハ此證據金ヲ或割五分ノ割合ニ至ラシムルヲニ盡カスヘシ
但之此證據金割合ハ便覽ノ為メ其時々ノ米價ニ見
合セ本條ノ割合ヲ目的トシテ切手一通ニ依何程ノ常ニ
取引所ニ揚示シ置クニ

第六條

若し賣方又ハ買方より此證據金半高賣買約定ノ
差入ハ分
又ハ追證據金ヲ差入レハ取引所於テ其ノ相場ヲ以テ
社員在場ノモノ之ヲ賣戻又ハ買戻之方ヲ為サシメ前ノ證據
金ヲ以テ決算スルニ

第七條

取引所より出スル證據金ノ預リ切手ハ都テ其賣買ヲ
為スル社員ノ名宛密先ノ注文
馬タリ托タル可シ且此預切手ハ他

他當物出シ又ハ質物ニ入テ許サス都テ其決算ノ節ニ此
切手ハ取引所ニ返附ス可シ

第八條

若し此切手ヲ紛失セシ者ハ速ニ之ヲ取引所申出テ約定
期限後之ヶ月ヲ經テ猶之ヲ察見セサレハ訛人連テ之
タル始末書ヲ取引所ニ受取リ先キニ預リタル證據金ハ當人
ニ返シ渡スルニ但此切手紛失セシト云ヒ期限内賣買
受シ及満期取引所ハ切手所持ノ分ト同様タリニ

第九條

非常事故発生又は不能止、差支アリテ、引所業体
ヲ七日以上休業トシ、或ハ時々賣買双方ヨリ倍證據金ヲ
出サシムルニ休業中ニテモ双方ノ承諾ヲ賣買及ニ勝手
先ハキ存者、或ハ決テ為シ先ハ其決算所引所ニ届出テ
其決算ヲ乞フ可シ

第十條

賣買上半證據金差出左ニ

一 百通以上半證據金

出納日ニ係ハラス翌日相場立會
前ニ差入ルヘシ

一 貳百通以上半證據金

即日差入ルヘシ

賣買證據金預リ手形ハ損益決算相立以上當人持余
仕切金ト引換ユル勿論ナリ若返附遅滞スルモノハ其者ノ
計算表若顛末ヲ越テ社中ニ揭示ニ後日其預リ手形ノ
證據ナキモノトスヘシ尤紛失届ケ差出セシハ此例ニアラス

第十一條

取引所、證據金系代金、都テ銀行ノ切手ヲ以テス

可之若之正金紙幣ヲ望ム時ハ前以テ其引合ヲ十二テ銀行
切手ト引替ヘ之ヲ拂込渡ス可之

手教科石立方之事

第十二條

當石引所ニ於テ約定ニタル米穀賣買ノ手教科ハ左通り
相定メ右賣買ノ分決算ノ節之ヲ石引ニ取立テ可之

定期取引ノ教科

賣買ノ節同前ニ於テ

現場取引ノ教科

曰

拾五宛

右ノ定限ヲ以テ其時ニ賣買高急ニ取付テ同高ヲ受取可之
但ニ便覽ノ為メ建米切手一通ノ相場ニ其合ニ存條ノ手教
料割合ヲ以テ切手一通ニ付定期現場トモノ教科何程
ト當ニ取引所ニ掲出ニ置ク可之

客先ヨリ社員ニ受取ルキ手教科 總テ取引所手教科ノ
三分一ヲ越スヘカラサルヘシ

米穀受渡之事

第十三條

賣買約定ノ米穀期限至リ受渡ニト為リタル分其月末
ノ日午後第四時限リ賣方ハ古米穀藏所銘柄書付
買方ハ其代金九分通り九十分ヲ取引所ニ持来スハ之時ハ
取引掛リ者古米穀買主ニ立合テ翌日藏所俵敷ヲ見分ニ
藏守ヲ預リ手形ヲ取リ其見分ニ米価適當ト定メ
分ハ九分金ヲ賣方ニ渡シ残り一分通り米證柄金藏出
ニ相渡シタル上テ取引所ニ於テ之ヲ決算双方取引後ニ
此約定ヲ終ル可シ

第十四條

右見分ノ米穀精米ノ内ニテ三割ヲ多カラサル正熟高仕
精米ヲ含メハ市中通例ニ引石ヲ以テ取引ヲ為ス可シ
其ニ此悉米割ヲ多キハ其分ハ取引ニ為サズ賣方
ヨリ代米ヲ出サシムルニ若シ賣方此代米ヲ吾ノ内出サシ
取引所ニ於テハ之ヲ違約人トシテ其重置ヲ為ス可シ
賣買双方ニテ見分ニ先後ニ關テ以テ藏所ノ順番ヲ
定メ雨天ヲ除キ其受渡ニテ為奇ニ但シ一日受渡俵

数ハ賣買ノ後高ニ見合セ所引所ニ於テ其割合ヲ定メ
双方ニ通達スルニ

第十五條

賣買主米石引所掛者立會ニ見合所ニ於テ其
上其米數ハ買方ノ所有タルニ付其後異変ハ賣方ハ
關係ナシ可シ

第十六條

米積貯ノ場ハ石引所附屬蔵外ハ淺草所蔵深川

第一圖系一石橋ヲ大川橋迄ノ間横川十四通り河岸
附蔵所ヲ用スルニ

相場荒高下之節露分ノ事

第十七條

若シ賣買ノ取組中ニ天然ノ荒高下アルハ或ハ社員ノ内
ニテ穩カナラサル賣買ヲ成スヲアラハ假令ハ商業ノ中途
タリモ肝煎ハ時宜ニ寄り證據金ヲ増サセ猶モ其商業
ノ平直ナラサル見留メハ其者ノ手合ヲ留メ別段増證

換金ヲ出サシムルヲ得ベシ

若シ天然ノ情リタル乱高下相場アル時ハ一切賣買ノ
利救ヲ許サズ又相對シテ大數ノ賣買ヲ附替ル事
ヲ許サス肝煎ハ若シ其高業ノ平直ナラサルヲ見留メハ
其者ニ限り分外ノ増設換金ヲ出サシムルヲ得ベシ

社員之事
第十八條

肝煎ニ總社員ノ中ヨリ社員取締役ヲ選舉スヘシ此
取締役ハ總テ肝煎ノ指令ヲ受テ賣買上ノ紛議ヲ鎮

定シ社員ノ進退及ヒ賣買上ノ諸般ヲ関務スヘシ

第十九條

當取引所ノ社員ニ新入シ或ハ復社セシト欲スル者ハ書
面ヲ以社員取締役ヲ經テ肝煎ニ申出ヘシ此書面ニハ
姓名宿所年齢高業等ヲ記シテ其證人及請人等
連名ヲ要スヘシ

肝煎ハ定式集會ニ於テ取引所ノ社員トナシテ相當
ナリト思考スヘキ人物ヲ社員ニ新任シ或ハ復社セシム

〽

但其新任復任ハ八日間取引所ニ揭示報告

ニテ後千之ヲ處置スルニ

當取引所ニ新入スル社員ノ身元金ハ五百圓ト極ム

ヘシ但社員身元金ハ悉ク銀行ニ預ケ其利未ヲ

社員ニ附與スルニ尤毎年二月八月兩度ニ計算ヲナス

〽

第二十條

株主ト當直ニ社員タルヲ許サス若社員タルヲ欲ス更ニ
身元金差出及ヒ一般ノ順序ヲ經テ社員ニ新任スルヲ
得ヘシ

社員新任復任^任トモ順序ヲ經テ故障ナキモノハ期限ヲ
間ハス退社ヲ乞フモノハ毎年二月八月ニ限ルヘシ

違約人之事

第二十一條

賣買取組ミシ昂日半證據金モ差出サルモノハ手合ヒ

戻之ニイタ之其モ身元金取上ケ相手方口配賦之
當人ハ除社スヘシ

相場高下ニ應之追証拠金差出サレモハ此成親第
六條ノ趣意ニ從ヒ其日ノ相場ヲ以テ賣買戻之ヲ為シ
次マテノ証拠金身元金之其不足ノ間金ヲ取テ
残金アレハ當人ニ返却シテ之ヲ除社スヘシ但右ニテ不
足金アレハ其分ハ相手方ニ割合ト決算スル可シ

第二十二條

社員取締役ニテ賣買戻ニテ成スニ事故アツテ止ラ得ス
時日遅延スルモ其取計ニシテ日ノ相場ヲ以テ計算スヘキ
ニ存社員等ハ之ニ違背アルハカラス

賣買戻組期限臨ニ其當日午後四時迄ニ截所銘柄
附差出サレカ九分金差出サレモハ之ヲ違約人ト見做シ
証拠金増証拠金共兩上ケ相手方口相渡スヘシ尤時間
ノ差ハ双方トモ日没ヲ以テ極ホス

但社員ハ一名ニテ客方数口ノ注文ヲ請ルル其

内規則相守リ其部分ハ異議ナク請渡シイタリ
セ又違約ヤシ分ハ本文ノ處置スヘシ

第二十三條

不熟腐化痛米ノ悪性三割ヨリ多クシテ其代米ヲ五割
間ニ差出サレバハ違約人ト見做シ銘柄藏付差出サレ
モト同新ノ處置スヘシ

第二十四條

請渡期限ニ至リ米穀見分際銘柄ニ違ヒアラハ格付

通りニ取行フヘシ若シ蔵所ニ相違アリハ拾石ニ付金壹
圓宛ノ謝金ヲ相手方ニ渡シタル上ニテ取引ヲ為スヘシ
左藏付番号ノ相違ハ謝金ニテヨハス

第二十五條

前條請渡ノ際品柄ノ善惡ニ付キ賣方買方ノ論
議及對シテ示諾ニ決シ難キ時ハ取引所ノ頭取ハ行
煎ノ衆議ニテ至當ナリトスル所ヲ以テ之ヲ決判シ其取扱
ニ隨ハシムヘシ若シ此決判ニ服セサル者アラハ之ヲ違約人

トナニ預リ置タル證拠金ヲ相手方へ渡シ破約償ト
ナシ其元金ヲ取上ケヘシ

社員ハ各此成規ヲ了知スル勿論ナリ凡其客先以篤ト
申聞カセテ注文ヲ受合フヘシ故ニ當取引所ノ社員タル
者ハ此成規ニ承諾ノ調印ヲ為サシメ置ク可シ

成規改正之事

第廿六條

此成規ニ相洩ルニ条件コルカ又ハ之レヲ改正セシム欲スル

アレハ頭取副頭取肝煎及ニ社員取締等ノ衆評ヲ
以テ考定シ其時々公許ヲ乞フニ之ヲ増補スヘシ
右東京米穀取引所成規ハ之ヲ三通ニ認メ本紙一
通寫一通ヲ上呈シ他ノ一通ハ同文言ニテ慥ニ之ヲ取引
所ニ蔵メ置候仍テ其保章為私苦自ラ記名調印
致候也

明治八年

東京米穀取引所

支配人

副頭取

頭取

御國債頭殿

